

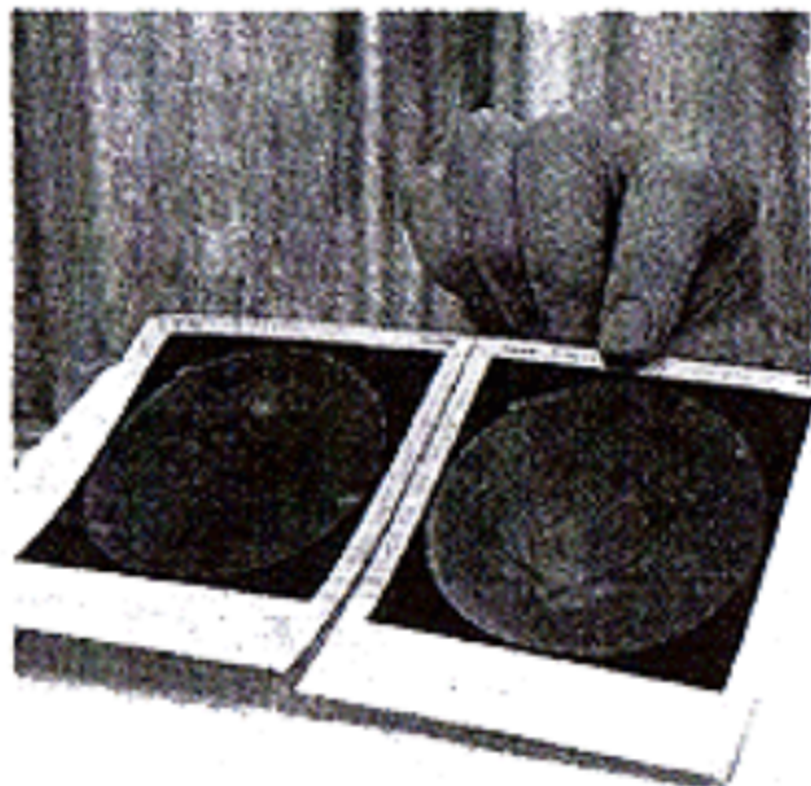
網膜症との闘い②

32歳で糖尿病がわかった岐阜県中津川市の小栗陽三さん(59)は、薬は飲んでいたものの通院は途絶えがちだった。名古屋市中で輸入住宅販売会社を経営し、多忙だった。だが5年前の夏、突然、右目の視野に青紫色のドーナツのようなものが現れた。愛知県の大塚病院でレーザー治療を受けることになった。

小栗さんの両目は、高血糖が続いて網膜の細かい血管が傷み、それを補うための「新生血管」が広がっていた。右目では出血も起きていた。そのまま放っておくと、失明することもある。

「レーザーで広く網膜を焼き固め、病状の進行を抑えます」。説明を聞き、瞳孔を開く目薬をした後、眼球内にレーザーが照射された。暗い室内がピカッ、ピカッと光った。計数百発照射し、30分程度で治療は終わった。

1、2週間おきに数回再照射し、両目で計1200発ほどを当てた。通院も続けた。



治療当時の小栗陽三さんの眼底写真。出血が広がっている。岐阜県岐阜市の北田内科クリニックで、加藤丈朗撮影

レーザー効かず眼球内手術

北田の住宅にはれこんで始めた仕事だった。なんとしても視力を失いたくなかった。

目の治療と並行し、北田内科クリニック（岐阜県岐阜市）に2週に1度通い、糖尿病専門医の北田雅久院長の診察を受けて血糖管理に努めた。急に血糖値を下げると網膜症が悪化することがあるの

で、飲み薬と食事療法で少しずつ下げる方針だった。半年後、血糖値は徐々によくなったが、目の状態は思わしくなかった。網膜のあちこちで出血が続き、視力も低下していた。03年2月、北田さんの紹介で東京女子医大病院（東京都新宿区）を受診。検査の結果、右目の網膜で、物を見るのに最も大切な「黄斑」という部分がひどくむくんでいることがわかった。

翌月、堀真夫教授の執刀で硝子体手術を受けた。眼球内の透明なゼリー状の硝子体を取り除き、人工的な液体に置き換え、腫れを抑える薬を注入する手術だ。局所麻酔で痛みは感じないが、小栗さんには堀教授らの動きが手に取るようにわかった。たくさん器具が目に入れられ、「どうやら怖かった」。右目はもうダメかも知れないと思つた。「大丈夫。見えるよ」という堀教授の声を聞いて、力が抜けた。

だが2週間たって、明日が退院という日。病室の外の花を見ていた小栗さんの左目がだんだんかすんできた。

「あれ、おかしいな」